

オーラルヒストリーインタビュー

対象者：黄川田 徹 氏

<略 歴> (東日本大震災関係)

平成 23 年 5 月 20 日～平成 23 年 8 月 31 日 衆議院東日本大震災復興特別委員会委員長

平成 23 年 9 月 5 日～平成 24 年 4 月 4 日 総務副大臣

平成 24 年 10 月 1 日～平成 24 年 12 月 26 日 復興副大臣

日 時：令和 7 年 9 月 26 日 (金) 13:00～15:00

場 所：復興庁 620 会議室

インタビュアー：飯尾 潤 (政策研究大学院大学教授)、清水 唯一朗 (慶応義塾大学教授)

復興庁：佐藤 将年、荒金 恵太、村田 敦、陣内 舞子 (復興庁復興知見班)

記録者：高山 修一 (株式会社 KWC)

1. 東日本大震災の発災前

・明治、昭和の大津波と陸前高田

○飯尾：まず、被災前のことをお聞きしたいと思います。お生まれは、陸前高田でいらっしゃいますか。

○黄川田：はい。私は陸前高田市でも半島 (広田半島) の付け根の方の広田というところの生まれで、そこから市街地の高田町に移り、黄川田家に婿養子に入ったんです。元は佐々木という苗字でしたが、きちんと名前も変えました。

私が生まれた広田町の泊漁港の辺りは、市でも一番海に近くて漁業の盛んな、ちょっとした平場のあるような地域でした。その町の歴史をひもときますと、明治 29 年に三陸大津波 (明治 29 年・明治三陸地震) の被害に遭い、私の家では私の祖母一人だけが生き残ったんです。他の方々も大勢亡くなりましたが、親戚をはじめ地域や社会のコミュニティがありましたから、支え合って立ち直ることができました。しかしながらその後、津波で流された同じ場所に家を建てていたんです。代々土地は動かないというか、そこに住むべきという思いとか所有権の問題があったんでしょうね。それから、さらに昭和 8 年に来た津波 (昭和 8 年・昭和三陸地震) でまた家が流されることになりました。明治 29 年の津波ほどの被害ではなかったのですが、昭和 8 年にも被災したことで、ようやく高台に移ることに

なりました。

ところが、移った高台で、また一階まで東日本大震災の津波が来ているんですね。これは波の高さが5メートル、6メートルのレベルじゃなかった、ということです。

○飯尾：今回は半島の付け根のところを波が越えてしまって、海のようになっていましたよね。

○黄川田：そうです。半島は船の舳先みたいな形ですが、今回は半島が津波を分けたような状態になって、今まで被害が少なかった高田松原、広田湾に津波が押し寄せたんですね。

話が少し戻りますけど、明治29年の津波については資料がほとんど残っていないんです。江戸時代の瓦版のような絵ぐらいしかないから、物語のことみたいに思ってしまう。ただし、実際には、祖母一人しか生き残れなかったという現実もあるので、私はその現実を受け止めて防災対策に取り組まなければいけないと思っていましたがね。

それから、私が小学校1年生のとき、昭和35年にチリで地震がありました（昭和35年・チリ地震）。そのとき潮が引いたもんだから、漁協の組合員のみなさんが魚とかアワビを取るために、どんどん海岸に降りていったんですよ。子どもは絶対ダメだと言われていましたが、大人は逃げられるから大丈夫みたいな感じだったんです。なので、私は高台から眺めているだけでしたが、たまたま陸に戻ってくる波を見てしまったんですね。堤防と同じくらいのせいぜい1、2メートルくらいの高さで、波は堤防を越えずにすーっと寄せて、またすーっと戻って、結局津波にはなりませんでした。ところが、高田松原の方は急に波が堤防を越えたようで、急いで日本百景の松の木に登って助かった人もいたようです。

○飯尾：広田の魚を取りに行った方々は大丈夫だったんですか。

○黄川田：ええ。あのときはゆっくり波が引いてゆっくり戻ったので、みんな間に合って、広田では津波の被害がほとんどありませんでした。高田松原でも、町の途中まで波が来て、勢いが弱まりちよろちよろと浸水して止まったようです。ただし、近くの米崎町では被害がありました。高さにすると3～4メートルもいっていないくらいかもしれませんね。一方で、隣接する大船渡市はリアス式で深く奥まった地形だから、そこで波がどんどんせり上がってしまい、盛のあたりがかなりやられてしまって、岩手で一番大きな被害を受けていました。津波の被害っていうのは、土地のかたちや波の向きが少しずれているだけで全然違うんです。

それからこの件で私がお伝えしておきたいのは、このチリ地震津波が、岩手の市町村の

防災対策の基準になってしまっていたということです。そうすると、5、6メートルの堤防で大丈夫だとなって、チリ地震津波が起こった昭和35年以降、その防潮堤を作って一段落ついたんですね。ただ、陸前高田の場合は景観を大事にしたいということで、前の市長（菅野俊吾氏）がテトラポッドを砂浜に投げ捨てるのではなく、人工リーフを作って、綺麗に並べて石が見えないようにしました。それで少しかさ上げをして、堤防が6メートルくらいにはなりましたが、今回は15～20メートル級の大津波なので、とても太刀打ちできませんでした。防災計画を立てたからといって2、3年で堤防を造ることはできなくて、10年、20年、下手をすると30年かかります。県が作る人工リーフも同じです。だから2011年の大津波には間に合いませんでした。一つの実体験に捉われて、逆に基本的な考え方を誤らせてしまった、という言い方はよくないかもしれませんが、そういうふうな考えさせられましたね。

実際に、東日本大震災の1年前にも津波（平成22年・チリ中部沿岸の地震）はありましたが、高さは2メートルもないくらいでした。ときどき4～5メートルの津波が来れば緊張感があって防災意識も高まるんですけど、そうでないと逆に油断してしまうようなところがあって、そのときも、もちろん養殖いかだなんかは壊滅してしまったので被害は大きかったですが、人的な被害はありませんでした。要するに、地震や津波はどこで起きるか分からないし、カムチャツカ（令和7年・カムチャツカ半島付近の地震）だってある。全部ひっくるめて想定して、備えていかないといけないんです。

一方で、市役所も県も、お金さえあれば50メートルの堤防だって作れるだろうし、国交省の皆さんもやってくれるのかもしれませんが、ただ作ればいいという話ではありません。やっぱり災害とうまく折り合いをつけて生きていく必要はあります。

○飯尾：50メートルもあつたら、逆にまちがなくなりますしね。

○黄川田：そうなんです。あとは、今もよく聞く話ではありますが、津波てんでんこについて、地震があった当時もこのことはよくわかっていたんだけど、頭の中でわかっているのと、現実にそれができるかっていうのは違います。

昔なら、弱い人はもうしょうがない。あとは、きちっと線香をあげて後の処理をしようとする人もいました。ところが、今は障がい者の方々も、いろんな方々も支えなきゃいけない。もちろん、昔も多少そういう部分はありませんでしたが、今は特にそういう時代です。だから、そういう人たちをどう避難させるか、という話が本当に大変になると思ったんです。

・陸前高田市役所での勤務

○飯尾：先生は陸前高田市役所にお勤めで、その後、県議会議員になられていますが、市役所にお勤めになるということはいつ頃から決めておられたのですか。

○黄川田：私には兄がおりまして、兄は先妻の子、私は後妻の子で、どちらも長男なんです。先妻である兄のお母さんが亡くなった後、うちの母が入って私が生まれました。それでも先妻も後妻もなく兄とは一緒に暮らしていて、兄は亡くなりましたが、ずっとお世話になりました。

私は高校が盛岡、大学は東京ということで、いろいろな就職先もあったのですが、母一人を残せないで地元に戻ると高校時代から決めていました。それで恥ずかしながら、どうせ地元に残るなら市長にでもなれないかなと思っていたんですね。当時の市長（熊谷喜一郎氏）は広田町出身で、尋常小学校を出て市長を6期もやった大変な人だったんですよ。結局、お前は戻って後を継げ、というわけではないけれど、戻って市役所で仕事をしろということになり、母もそれがいいだろうと言ってくれたので、市に戻ってきて市役所で働くことになったんです。

○飯尾：お母様のこともあるし、周りの期待もあって市役所に入られたわけですね。

○黄川田：陸前高田は人口が2万しかいないまちだから、一応職責は与えられているけれども、なんでも御用聞きのようにやっていくような形でした。そういう中で、防災関係を含む総合計画の企画を立案する企画課にもいたんだけど、500年、1000年のスパンで防災を考えられていなかったもので、どうも自分の経験の範囲の中からは政策が出なかった。そのこともあって、個人的な反省だったり、次こそはという思いが強かったです。

・岩手県議会議員への就任

○飯尾：それで、市役所に勤めてから県議会議員になられたわけですが、これはどういう経緯だったのですか。

○黄川田：県職員の中には、市町村の職員をちょっと下に見るような人がいたんですよ。今は地方分権一括法ができたりして変わりましたがね。県庁は盛岡に本庁、各出先に地方振興局があって、この本庁職員と出先職員の間、仕事の取り組みに対しての差があるように当時は感じていました。出先の職員は、現場の県民を見るのではなく本庁の方を向いているのではないか、盛岡に戻りたいのではないかと思われたんです。具体的には、平

成5年の大冷害のときに東北が大打撃を受けたのですが、その復旧や復興をどうするかでいろいろ県に提案しても、なかなか進まなかったことがありました。振興局を通さないと県庁に届かない仕組みなので、現場の生の声が県庁に届かなかったんです。

○飯尾：そういう思いを抱いていたんですね。

○黄川田：思うだけじゃなくて、それなら直接県庁に行くかとなるわけです。

○飯尾：市役所にいるよりも、県議会議員になったほうが早いということですね。居心地の悪さを感じておられたんですか。

○黄川田：県の職員も皆さん公務員で立派な方々ではあったのですが、本庁と出先の関係については、仕組み自体がおかしいんじゃないかと思っていて、議会ならそれを個人攻撃にならずに、制度として変えていけるのではないかと考えていました。その後、地方振興局に権限が与えられ、出先を通じて有為な人材が本庁に集まるようになりました。

それともう一つ、小沢一郎さんの存在がありました。うちの義理の祖父が小沢一郎さんの地元の後援会の会長をやっていたので、目をつけられたのかもしれませんが。ただ、最終的には平野達男さんと同じで袂を分かつことになりましたね。

・衆議院議員総選挙への出馬

○飯尾：衆議院議員総選挙に出られたのも、その関係で進められたんですね。ご自身で出馬される時に抱負はおありでしたか。

○黄川田：いや、私は最初に言った通り首長になるつもりだったので、議員向きじゃないんですよ。特定の人たちの票をもらって議員になって、その特定の人たちのために働くとか、あるいは政策が同じ者が集まって政党をつくって頑張るとか、そういうつもりはなかったんです。私は元々市役所の職員だから、みんなのために仕事をしたい。一般職の公務員であって、特別職の公務員には向かないんです。ただし、政党の支援を求めない首長は別ですがね。

けれども、なんだかんだあって結局周りを見たら私が候補者になっていて、県議会議員になってから5年で、衆議院議員になったわけです。そのころ、小沢さんは自由党を立ち上げ議員候補者の人数を揃えようとしていましたが、当時、私と同じ衆議院小選挙区の中に自由党を支持する県議会議員が7人いて、先輩議員には議長を経験した人もいたので、まさか私に白羽の矢が立つとは思わなかったんです。

いきなり東京に連れてこられて今日発表だということになって、誰になるんだろうと思

ったら「お前だ」と言われました。地元紙の岩手日報も、もちろん私が出ると思っていなかったから、黄川田が出馬するという情報が間に合わなかったんですね。夕刊でさえ隅々まで情報を届けることはできなくて、間に合ったのは近くの盛岡周辺だけだったので、地元の陸前高田の人たちも知らなかったんです。盛岡から陸前高田に「夕刊に出てたけどどうなんだ」って電話する人がいて、それで初めて知られたようです。

○飯尾：ご自身がなりたいたと思ったわけではなくて、成り行きでなってしまったんですね。

○黄川田：県議会議員になった時はまだ 41 歳で、そのときの市長（菅野俊吾氏）とは 20 歳も違いました。その前の市長（熊谷喜一郎氏）は 6 期続けられた立派な方で、自分がなれるかなれないかはわからないけれど勉強してその後を継いでいきたいと思っていましたので、国政に行くとうなるということでもいろいろと考えたのですが、その場で判子を押せ、出る、みたいな話になってしまいました。だから、永田町はどういうところで、国会議員はどんなかたちで、秘書がどうなるのかも全然知らないで来たんですよ。でも小沢さんは大したもの、万全な秘書を付けたのでなんとかなるから大丈夫、みたいな感じでした。

○飯尾：そうですね。それで国会議員としてスタートされてですね、その後は自由党から民主党になるなどされたわけですが、防災関係で専門的に国会議員としてされたことはありましたか。

○黄川田：三陸に生まれ津波の被害を知る者として、いろんな思いや経験もあるから、災害対策特別委員会には必ず入っていたんですよ。

しかしこれはこれで慚愧に堪えないというか、やっちゃって恥ずかしいという話ではあるんですが、昭和 35 年のチリ地震津波を自分は経験したことがあるということで、そこで何かしゃべれると思ってしまっていたのです。あのチリ地震はこうだった、とか語ってました。私は明治 29 年（明治三陸地震）も昭和 8 年（昭和三陸地震）も経験していません。しかしながら当時と比べてさらに科学的知見も増えてきていたので、いつ何時、どういことが起こるかもしれないというような話をしておくべきだったと今になって思うわけです。

○飯尾：インドネシアのアチェで津波（平成 16 年・スマトラ島沖地震津波）とかございましたでしょう。あの時はおいでになったりされたんですか。あれはかなりの被害でしたよね。

○黄川田：行きませんでした、スリランカとかインドの方まで被害が出たぐらいの、も

のすごい津波でしたね。

○飯尾：関心はあるけれども、東日本大震災までは、あんなことが起こるといふふうには思っていらっしゃらなかった。

○黄川田：全然思っていないでしたね。

2. 東日本大震災発災当初

・地震発災当初

○飯尾：3月11日になりまして、地震が起こった時はどうしておられましたか。

○黄川田：3月11日は金曜日でしたが、国会議員は金帰月来、金帰火来みたいな形で、金曜日は地元に戻るといふことになっています。私は16時半ごろの新幹線でいつも地元に戻っているものですから、いつもどおり帰る準備をしていました。地震は14時46分でしたが、16時ちょっと前には議員会館を出るつもりで。ところが、そこに地震が起こりました。

○飯尾：では国会の委員会には出ておられず、会館におられたということですね。地震のことは、どう思われましたか。

○黄川田：この地震の大きさで、それで三陸だって話でしょう。具体的な震源地はもう少し後から知ったかもしれませんが、すぐさま自宅に電話をかけたらずぐに通じて、ちょうど家内が出ました。東京もすごかったから、もうめちゃくちゃだろうと思い、家屋倒壊もあるんじゃないのかって聞いたら、「いやいや、家屋の倒壊はない。物は当然落ちていますが、いいえ」ということでした。

○飯尾：皆さん地震の備えがありますからね。

○黄川田：私の頭の中には5メートルのチリ地震津波のイメージがあったので、「津波が来るかもしれないから、そのときは世話をしなさいよ」と言いました。昭和35年のチリ地震津波以来、津波は来ていなかったし、それもチョロチョロで終わっていますからね。

○飯尾：逃げてくる人があるだろうという感じですよ。

○黄川田：うちは母屋とは別に、小さいけども頑丈な鉄筋コンクリートの3階建ての家があって、そこに私が住んでいたんです。これは地震でもなんでも倒れないし、屋上までの高さも10メートルぐらいあるわけですよ。普通に考えると、いざとなれば上に逃げれば大丈夫だと思っていましたが、20メートルの津波ですから、その上の上に行きましたね。

○飯尾：では奥様と話をされたんですね。

○黄川田：市役所からいろんな指示があるだろうから、その指示に従って、しっかり世話をしなさい。俺は行けないから頑張ってくれみたいな感じです。

○飯尾：政治家ですから、皆さん頼ってこられますよね。

○黄川田：ところが、テレビを見たり、いろいろなことをしている間に、10分か15分後にはもう電話が通じなくなりましたね。津波が来るまでは30分くらいありましたから、津波が原因で断絶したわけではなくて、その前にはもう通じなくなっていたようです。ひとこと言わせてもらえば、この地震は午後2時46分だったけれど、もし次の日の夜中の午前2時46分に起きていたら、自分も帰って一杯やって寝ている時間ですから、私も娘もいなかったらと思うます。当時は娘が大学生で、卒業を前に免許を取りたいということで、地元の自動車学校に行っていて、そのおかげで彼女は助かったんです。

あとは、義父も義母も家内も、近所に勤めていた息子も、そして秘書さんも自宅に来ていました。事務所も倒れていないし、なんてことなかったんだけど、大きな地震ですって言う間に大変なことになりました。そして、もう間に合わないということになり、秘書の車に義父、義母、家内、息子の4人が乗って逃げたんだけど、案の定、間に合いませんでした。ここに反省点もあるんだけど、渋滞で逃れられなくて、間に合わずに津波で流れてしまったということなんです。

本当に昼間でも情報がないのに、夜だとより一層何にもありませんから、倍ぐらいの被害があったんじゃないかなとは思いますが。だから犠牲者が2万人で収まったのは、関連死も含めて2万人ですけれども、昼に起きた震災だったからというところがありますね。

○飯尾：ご家族が逃げられなかったということをお知りになったのは、いつごろですか。随分経ってからですか。

○黄川田：通信がダメになったのですが、県庁の防災電話かなにかで達増〔拓也〕知事から私の携帯に電話が入ったんです。県庁の防災ヘリが三陸沿岸に飛んで高田に行ったら市街地はもう水没しているということでした。水没しているということは、難しいだろうと覚悟しました。

それから次の日の夜、避難した人が撮ったビデオがテレビで流れたんです。地元の酔仙酒造（酔仙酒造株式会社）という酒屋さんに、15メートルか20メートルぐらいの大きな看板があったんですけれども、これがなぎ倒されていく映像を見ました。

○飯尾：高台に上がっていく途中の坂の下のところですよ。

○黄川田：そうです。その坂の上が高田第一中学校で、ここが避難場所だったんですが、

その避難場所にうちの家族は来なかったんです。酔仙酒造の看板が倒れた映像、達増知事からの市街地が水没していたという情報、そして全然連絡が取れない事実を踏まえると、これは無理だなと思いました。酔仙酒造は海岸から2キロぐらい離れていましたが、津波は海拔で決まるので、平らなところをどんどん来ます。海拔は2メートル、3メートルぐらいしかなかったか、そんなもんですからね。おまけに、あの辺りは気仙川という川があって、川を遡上した波がまた襲ってくるんです。

○飯尾：そうでしたか。国会議員をしておられると、ご家族も心配だけれども、それなりに連絡してこられる方がありましたでしょう。各地それぞれはありますよね。

○黄川田：ありましたが、通信が繋がらなかったのですね。あと、岩手では停電があって、テレビも全部見られなかったです。だから、最初の段階で力になったのはラジオでした。

・岩手の同僚議員と現地へ

○飯尾：そういうことで東京におられて、現地との連絡がつき始めて、県庁から情報が入るとかあったと思いますが、いかがでしたか。

○黄川田：県庁も最初の3日間は現地まで行けなかったらしいです。なんとか先発隊を組んで行ってくれと言っても、瓦礫で庁舎まで着けないということでした。例えば大槌まで行くには瓦礫を取り除かないと、とてもじゃないけども行けないというのです。

○飯尾：道路啓開が済んでからということですか。

○黄川田：そんな感じです。自分たちとしても新幹線が当然止まりましたから、どうやって帰るか悩んでいたのですが、3日後か4日後に個人的に飛行機が取れたんですよ。ところが、岩手の衆参の国会議員みんなで行こうとなり、早く行きたかったのが、さらに2、3日遅れてしまったんです。結局乗ったのが秋田行の飛行機だったので、民主党県連の車を秋田まで持ってきて、その足で岩手県庁に行って、それから地元に戻りました。

○飯尾：その頃は少し道路が開いたところもあった感じですよ。

○黄川田：そうですね、車で行くことができましたから。私の個人事務所は陸前高田市ですが、一関にも事務所があります。一関は内陸なので津波の被害はありませんが、不思議なもので、地盤の関係なのか地震の被害は一関が大きかったみたいで、屋根にビニールシートがいっぱいかかっていた。一関はいつも宮城県沖で地震が起きるとやられるんですよね。ただ、そっちの事務所は大丈夫でした。

○飯尾：大丈夫だったんですね。では、一関から逃げてきた人とかで、東京におられても

情報があったのですか。

○黄川田：東京に来る情報は、やはり現場の生の声ではないですからね。そうこうして地元に戻り、高台にある高田第一中学校からの景色を見て、これは終わっているなど、終わったことは取り戻せないと思いました。

陸前高田では、最初の頃、行方不明者の掲示板で、私の家では誰々がいませんとか、紙に書いていっぱい貼っていたんですよ。あと、公共施設がすべてやられて、残った公共施設は高台にあった給食センターぐらいだったので、その給食センターが臨時の市役所になっていました。

市役所と言っても、事務室があるわけではなくて、調理場しかないのにどうやって仕事場にするんだという話になりましたが、働く人たちの休む場所として畳の敷いた部屋があったので、そこを市民課の窓口にして亡くなった方の死亡届を受け付けて、火葬の段取りをする業務がすぐさま始まりました。

私の同級生や同期の市役所職員もいましたので、被害はどうだったと聞いても、みんな言葉にしないんです。380人ぐらいいた職員のうちの100人ぐらいがいないんですよ。仕事はしているけれども、言葉を出せないですよ。ある人は、俺は生きてしまったみたいなことを言っていて、淡々と過ごすしかないという感じになっていました。

・義弟の車で陸前高田周辺を視察

○黄川田：その後、陸前高田だけでなく周辺にも足を延ばしました。私の義理の妹が内陸の千厩（一関市）のガスを売っているところに嫁いでいて、当時、ガソリンが不足していたので、義弟にガスの車を貸してもらい彼と一緒に周辺を見て回りました。まずは千厩の隣の気仙沼、本吉（気仙沼市）へと向かいました。ただその後に志津川（南三陸町）まで行こうと思ったら、本吉の大きな橋がもう駄目で先に行けなかったんです。復旧するにはしばらく時間がかかりそうだということで諦めて一旦戻って、今度は隣の大船渡、釜石、そして大槌まで行きました。現場を見て、これはもう大災害どころじゃないと思いました。500年経っても経験することはないというぐらいの、すごい光景だったんです。

これは余談ですが、釜石の手前の唐丹では町を流れている県管理の川の水門がやられてしまって、漁師さんたちが、まだ発災から1週間しか経ってないけども、秋のサケが上がるのにこれは困ったという話をしていたんです。近くを歩いていたら、「黄川田さん、おい、これ見てしろ」と声をかけられて、水門の復旧をどうするかという話をしました。津

波に遭って、人も亡くなっているんだけど、次に向けて動かなきゃいけないっていう人がいるんだと、漁民の皆さんのこの活力には驚かされましたね。すぐに県庁の水産振興課に連絡して、秋までにはサケが帰れるように頑張ってくれとお願いしました。海とともに暮らすということはこういうことなのかと、起きたことはしょうがないと、動き出すことなのかなと思いました。

○飯尾：唐丹の皆さんは結構、前の震災で高台移転していた人が多かったですよ。

○黄川田：ただ、高台移転したところまでも波が来ているんです。もちろん高台ですから死ぬことはないというか、低地の方で少しやられてしまった方もおりますけども、それまでの被災の経験があったから事前に高台へと移転していました。

そして釜石に行くわけですが、釜石の鶴住居というところがひどい話になっていたんですよ。当時は三陸縦貫道の整備をやっていて、震災のちょうど1週間前に鶴住居のところの道路が開通したのですが、その祝賀会を鶴住居の防災センターという名前のあの場所でやっていました。野田〔武則〕市長も、だから釜石の奇跡とか言われたくないなというところもあったと思います。

○飯尾：鶴住居の方は、わざわざ防災センターに逃げて津波にやられていますからね。

○黄川田：私だって鶴住居にいたら、避難場所かなと思って集まってしまっていたらと思うですね。小中学校の児童・生徒たちは、立派に道路の高台まで上がってきて助かったんだけど、逆に大人たちの方が大変なことになってしまいました。

今あの場所は伝承館みたいな形にしていますけれども、難しいですね。現場を見る中で、これについて野田市長とは一度も話していませんが、1週間前にはそこで三陸縦貫道鶴住居工区の開通祝賀会をしていたわけで、それで防災センターの現実はこちらだし、一方で小中学生たちは釜石の奇跡みたいなかたちですからね。こういうところは、災害の罪な部分だなと思いました。

○飯尾：それが発災後10日ぐらいのことですよ。それで一度東京に戻られたんですか。しばらく地元におられたのですか。

○黄川田：すぐに現場を動かそうと言っても難しく、まずは国交省の皆さんの啓蒙でした。あのときは、市町村や県とは違う国の實力を見た気がしましたね。国交省にこれからお世話になるという気持ちがあったからそう思ったのかもしれませんが、それだけではなかったと思います。当時の東北整備局の局長だった徳山〔日出男〕さんには一生懸命やっていただきましたし、その後も東北に関係があるような人たちが一生懸命やってくれまし

たね。

それと、TEC-FORCE ですね。ちょうど最前線にいて、すぐさま出陣できたというところが、やっぱりすごいなと思いました。私には役所の係長の気持ちがあったので、国交省の実力を目の当たりにしたと、当時思っていましたね。

○飯尾：しかし、あれも地震の被害が少なかったから、啓開ができたということで、今度の能登の地震みたいに道が崩れたりするとできないんですよ。

○黄川田：でこぼこになっちゃったり亀裂が出たりしたら、もう何もできません。だから、あの岩手、宮城だけに限れば、大きかったのは地震ではなくて津波被害なんです。だから、地震そのものでやられた阪神淡路（平成7年・阪神・淡路大震災）とは違います。妻との最初の電話で、家は大丈夫かって聞いたら大丈夫だって言われて、地震の方は大丈夫だったから、これから恐ろしい津波が来るということまではね。

○飯尾：これも難しいですね。災害はそれぞれ違いますからね。

・家族4人を茶毘に付す

○飯尾：道路局が総力を挙げてそれなりに道は開きましたが、先生ご自身はいつまで地元にいるつもりですか。

○黄川田：地元に戻った後、3日はいたんです。そうしたら3日後に息子が見つかりまして、それで東京に戻りました。そしてまた次の週に、義理の母も見つかりましたが、その後はなかなか見つからなかったんですよ。最初の10日間ぐらいは、4人も亡くなっているから、探していて大変だなと言われるけれども、10日を過ぎたら自分のことだけをするとはなかなかできなくて、探せませんでしたね。

○飯尾：車で一緒にお逃げになっていたんですけども、車のまま見つかったわけじゃなかったんですか。

○黄川田：車からみんな出されていて、車の中で見つかったのは義理の母だけです。シートベルトをきちんとやっていたので、瓦礫を除いた泥の中から一週間ぐらいで見つかりました。

残念なのは義理の父です。見つかったんですけども、遺骨になって返されました。というのも、1週間とか10日の間に何千人という人が遺体で上がるわけです。そうすると、火葬が難しいんですよ。自分の地元や周辺は当然無理だし、花巻とかでも無理で、結局秋田に運んで行って火葬したところもあります。身元がわかると、この人は宮城県に、とか

言って振り分けができるんだけど、義理の父の場合は私がなかなか見つけに行けなかったの、この人は家族が見当たらない人だということになって、千葉に送られていました。そして千葉で身元不明のまま茶毘に付されたのですが、当時マスコミでもよく言われていたように、歯の治療の記録があったので、それで本人確認ができたんです。

それからお盆になる前に家内が広田湾で見つかったのですが、状態が大変だから見ない方がいいよという話もあったぐらいで、DNA 鑑定をしなければ本人かどうかわからなかったんです。自分の子どもとか親戚とか、DNA 鑑定をしたことで家内だということがわかって、家族4人、その都度あちこちで火葬をお願いしていました。

○飯尾：そうでしたか。お立場もあって大変だったんですね。

○黄川田：これぐらいひどいとなぜか涙も出ないんです。それと恥ずかしくて、明治29年の明治三陸地震の津波で一人生き残った亡き祖母に申し訳ないという気持ちでした。

身元確認に関してもう一つ印象に残っていたのが、通常は地元警察の担当の人たちが対応しているわけですが、人手が足りないということで、県内の内陸各署から職員が集められていました。その中でも若い女性の事務官が涙を隠さず、黙々と遺体の前で職務の遂行に従事していた姿が思い出されます。

・議員活動の再開／党議員への思い

○飯尾：10日後から国会議員としての活動も始められたわけですが、できることは限られますよね。どうされましたか。

○黄川田：安住〔淳〕さんとはね、いろいろな話をしました。

○飯尾：安住先生も、ご出身が牡鹿半島ですからね。

○黄川田：お父さん、お母さんはなんとか助かりましたが、後にお父さんが亡くなられてしまったんですよね。お互いに家も事務所も、震災で何もかもやられてしまっていたので、安住さんは宮城で一番ひどい石巻、私は岩手で一番ひどい陸前高田ということで、これはどうするかなというような話をしていました。単純な復興という仕組みでは無理だろうけど、特別委員会もできるだろうから（黄川田さんは）被災者の一人として頑張れるのではないかと、いろいろ話していましたね。

○清水：特別委員会に入られるまでに、党の方でも対策本部を作られていて、幹事長以下で動かれていたようですが、黄川田先生は入れなかったのですか。

○黄川田：岡田〔克也〕幹事長には大変お世話になり、ひた向きなご尽力をいただきましたが、私は震災の復旧復興に与党も野党もないというスタンスなんです。ところが、2009年の総選挙で民主党は若手の議員たちがいっぱい当選したんですよ。ああいった方々が議員になったのも面白いんですけど、中には、私も震災復旧を頑張っていますって、作業服を着てスコップを持って現場の写真を撮ってネットにあげているような感じだったんですよ。安住さんも怒っていたけれども、何をやっているんだと思っていましたし、私たちの田舎言葉で言えば、ごせっぱらやげた。頭にきたという意味です。私はそういう人たちとは、あんまり一緒にやる気がしなかったんですよ。

このオーラルヒストリーでは、谷〔公一〕さんにも聞き取りをされているということでしたが、私は、阪神・淡路大震災のときに兵庫県の職員として一生懸命頑張っていた谷さんや、亡くなってしまいましたが、中越地震（平成16年・新潟県中越地震）のときに山古志村で村長を務めていた長島〔忠美〕さんのような人と仕事がしたいと思っていました。神戸市なら政令市だからなんてことないと思いますが、谷さんの選挙区は山のほうで過疎地も含まれるので、話が合うんですよ。過疎対策っていうのは、与党も野党も同じということで超党派でやっていますが、震災もそうだろうと考えていました。ただ、うちの党には、谷さんや長島さんみたいに実務をよくわかっている人は少ないのではないかと思っていたので、私はあまり対策本部に入る気がしなかったんです。

○飯尾：進んで入らずに、外から見ておられた感じですね。国交省とか、役所とはやり取りをしておられましたか。

○黄川田：そうですね。国の予算だけでなく、市町村レベルでもそうなんですけども、なかなか財源がなくて一発の当初予算で決まってしまうからね。ある意味、こういう重大な状況になれば、予算措置には自分らの仕事や自分の持てる力を発揮できるということです。一次補正もすぐに作られていましたが、そういうのもしっかりやってもらわないといけないですし、単に地方交付税をつければいいということではなく、長期的な計画の中でやることになるだろうから、当座はまず道路の啓開みたいなところから始まって、どんどん予算措置もやってほしいということは話していました。

・中央省庁から市町村への人的支援の必要性

○黄川田：先ほどお話しした通り、大槌もそうなんですけども、特に陸前高田では多くの職員がいなくなっていました。復旧復興の現場は間違いなく市町村ですが、人材や財政の

部分は国の支えがなければ、なんともならないのです。そこで、昔は助役さんって言ったんですけども、その辺のところに各省庁の元気な人たちが来てくれたらなと思っていたら、ぴたりと人材を派遣してくれました。国交省は結構人材を出していましたし、内閣府や総務省からも来ていましたね。

○飯尾：来ていましたね。陸前高田にも副市長で来ていました。

○黄川田：自治体は財源だけじゃなくて人材も失ってしまったので、市町村と県、国が連なるもので支えて復興しないと、いかんともならなかったんです。これまで市町村レベルに国から出向するというのは、政令都市を別にすればほとんどなかったんですよ。あっても総務省ぐらいでしたかね。

結局のところ、財源と人材が一番大事だと思います。それは取りも直さず長期的な事業になるということで、そこのところは、なんとかできるかなと思っていました。過疎対策も、上手に自分たちで法律を作って、議員立法だということでやれば、与党も野党も反対しないですからね。

3. 東日本大震災復興特別委員会委員長就任（平成23年5月20日～平成23年8月31日）

・東日本大震災復興特別委員会委員長への就任経緯／党派を超えた交流

○飯尾：そういうことをしておられるうちに、東日本大震災復興特別委員会委員長になりました。これはどのような経緯だったんですか。

○黄川田：当時国対委員長だった安住さんが、お前しかないだろうということで私を推薦しましたね。私は自分から手を挙げたことは一度もなかったですが。

それから、震災が起こる前に私は総務委員会で筆頭理事を務めていたこともあり、この間に過疎対策法（過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律）を成立させることができました。議員立法であり、超党派の議員を取りまとめる仕事でもありましたが、与党・野党にかかわらず全会一致の法案でした。この際、先にお話しした通り、阪神・淡路大震災の谷さん、中越地震の長島さんらに、大変お世話になったわけです。そういったこともあって、今回も風通しのよい方々と共に、復旧・復興に汗をかいていけたらと思っていました。

○飯尾：そういう思いを持っておられたから、超党派でされるというのは、委員長にぴったりだったんですね。

○黄川田：私はね、自民党の人たちとも話ができるような感じでした。

○飯尾：どんな人たちが有力メンバーだったんですか。

○黄川田：野党の筆頭理事は今の衆議院議長の額賀〔福志郎〕先生でした。そのとき自民党の大臣クラスの方々が、役職がないから各委員会の理事会の筆頭理事になるような感じで、もっと現場でやっていた谷さんも、その後大臣になったけれども当時は「黄川田」「谷」と、こんな感じで話をしていました。そういうことで、自民党の人たちともやり取りすることができましたね。

さらに言うと、委員会を進めるにあたって、うちの菅〔直人〕さんは頭が良すぎて、なんでも仕切ろうとしすぎてしまったところがありました。原発の関係でも何の関係でも、別に嘘は言っていないしまともなことを言っているんだけど、政権を取って打たれたことがないから、打たれ強い自民党と違って適当に流して話すようなことができなかつたんですかね。質問されて頭に血が上ってしまって、ちゃんと答弁しなかったこともあって、菅さんは民主党の総理で私も同じ民主党から出ている委員長だけれども、今の答弁は聞き捨てならんということで再答弁にしたこともありました。その質問をしたのは、高市早苗さんでしたが、そのようなところは気を付けて進めていましたね。

あと、一番残念だったのは原発事故ですね。偉い人たちがいっぱい来るんだけど、なかなか先が見えないんですよ。見えないというより、確かなデータを自分たちも用いられていなかったということなのかもしれないですが、我々は地震で3分、津波で1日だけれど、福島の人たちにとっては、原発で何十年ということなので。

○飯尾：その段階では、まだ福島の原発はどうなるかわからないですから、復興まで議論が行かなかつたですよ。

○黄川田：委員長としては、被災地の現場は市町村であり現場の意見が必要だと考えていたので、漁業協同組合の方々とか、水産加工業の方の生の声を聞こうということを実施しました。とてもじゃないけれどすぐには難しいので、ちょっと経ってから、5月下旬ぐらいのことですけどもね。津波はあったんだけど比較的被害が少なかった八戸では、水産加工の方もなんとか仕事ができるようになってきていたのでその関係者を呼んできて、福島、岩手、宮城の水産のことも含めて喋ってくださみたいな形をお願いして、憤懣あることなど、いろいろな要望を伺いました。

これはまた余談ですが、宮城の漁協組合の方が、私と同じように訛り丸出しだったんですね。安住さんが来たような感じです。かつて、フランスで牡蠣が病気になって種の牡蠣

が必要になったときに提供したのが松島や石巻の人たちなのですが、その当時、種の牡蠣を作っていたら儲かるからと言われたものの、結局フランスもすぐに自前で用意できるようになったので騙されたと思っている、みたいなことを話のやり取りの中で言っていたんですよ。そんなことを「種牡蠣（たねがき）な。ろくなもんじゃないな」と話していたんです。

そうすると半分半分で話を聞いていた自民党の人たちにも聞こえるものですから勘違いした人がいてね。なんか当時自民党の総裁だった谷垣〔禎一〕さんの悪口を言っているみたいな話になりました。きっと種牡蠣（たねがき）が谷垣（たにがき）に聞こえたんですね（笑）。結局こうなんですと説明して、そういうことか、なるほどと納得していただきました。

○飯尾：翻訳をされたんですね。

○黄川田：訛りの通訳をしました。皆さん、言いたいことがいっぱいあるので、そういう笑いも取らないとですね。

○飯尾：現地においでになることもあったんですか。

○黄川田：現場は各党ごとにそれぞれで行く形でしたが、受け入れ体制も大変だったので、委員会としては5月以降に行きました。

・東日本大震災復興基本法案について

○飯尾：そういう中で、最初に東日本大震災復興基本法案というのが出てきたんですけど、政府提出法案と自民党提出法案がちよっとずれたりしていました。復興庁設置の点とか、改めて出し直したりもされていましたが、民主、自民、公明党の起草案とか、このあたりのお話を伺えますか。

○黄川田：自民党は、これまで大災害のいろんなプロジェクトを立ち上げたり、いろんな計画を作ったりしていました。与党であったし、計画したことを実行できるような立場にあったので、いろいろと経験もあってうまくやれたと思うのですが、その一方で、我々民主党が政権を取って、国として政府として作っていく上で、私も個人的に心配していたし、皆さん、特に被災地の議員さんたちが心配していた点がいくつかありました。

まず第一に、先ほど国交省は大したもの、力強いとは言ったけれども、国交省だけでは復旧復興にならないのです。社会資本の整備、インフラの整備は国交省にきちんとお願いするけれども、それだけではなんともならないだろうということで、農林水産省も最初は

農地の除塩をしなければいけなかったりとか、いろんな要素がありました。

それぞれが一般会計の予算編成の時に取れなかったお金を措置して、なんとか頑張ろうとそんなふうになってくると、単年度で終わる仕事ならいいですよ。でもとてもじゃないけど10年はかかるみたいな仕事となれば、できれば特別会計にしてもらいたいし、しなければいけないなという話になります。ただし、特別会計にするには対応する財源がなければいけないので、そこは国民の皆さんに財政負担をお願いしないといけないわけです。

それから、いつも言われる通り、省庁は縦割り行政だということで、そういう部分もどうなんだろうと思うところがあります。阪神淡路の時は各省庁で頑張るということになっていたんですが、岩手の人間にとっては、後藤新平の関東大震災の復興院の関係があるからと言うことでもないけれど、何かしらの組織をつくるのは当然だろうと思っていました。与党も野党もないという気持ちの中で議論を進めて、徐々に委員長提案の法案にしましょうという流れになりました。私がしてくださいと言ったわけではありませんが、皆さんその流れになったんですね。

○飯尾：各党が歩み寄るといふか、相談をされたんですね。それは委員長も加わって相談されたのですか。それとも各党の理事が相談して作られていたんですか。

○黄川田：あんまり委員長は出ない方がいいですよ。だから皆さんの総意でそう思ったと思いますし、ただ、こういう形で話してくれということは言ったかもしれません。自分が委員長として出て話すと、こういうものはまとまらないんです。

○飯尾：その雰囲気をつくったということですね。周囲は菅総理を辞めさせる動きもあつたりしてざわざわしていましたが、委員会自体は与野党ともに、皆さんいろいろな仕事に協力してやるという雰囲気でしたか。

○黄川田：法案が衆参の本会議で通った後、委員長にも交際費みたいなかたちで、お世話になりましたということで飲みに行くお金があったかもしれないけれど、震災関係で国のお金を使って慰労会で飲むわけにもいかないだろうと思っていました。

ただ、私にはお金がない。家もないし、事務所もないし、何もなくなって、挙げ句の果てには背広もなかったの、北海道の三井〔辨雄〕先生からいただいた背広を、ちょうどいいなということで着ていたんですよ。

そんな話もあったので、5000円の会費で懇親会をやりますから集まってくれますか、と共産党も自民党も衆議院の委員会の理事の方に声をかけました。場所は近くの焼き鳥屋さんだったんですけど、大船渡に本社があるアマタケさん（株式会社アマタケ）のプロイラ

一を出しているお店で、私も以前から懇意にしていたんです。そこで冷やかしてね、「昔は委員長のあれがあって飲んだんだけどもな。でも、自前で飲む酒は美味しいな」とか言って、盛り上がりました（笑）。

○飯尾：与党も野党も含めて、皆さんで居酒屋に行って飲み会をできるような雰囲気だったわけですね。かえって自前だから来られたという方もいるかもしれません。

○黄川田：青森出身の、共産党の高橋〔千鶴子〕さんなんかも出席していましたね。

○飯尾：良い思い出ですよ。その法案を通してからも 8 月まで期間はあったんですけど、その後、委員会としての活動はありましたか。まだ政府の法案が秋にならないと出ないですからね。

○黄川田：参考人質疑はありました。特に、原発事故に関しては。

・岩手県内の首長との交流

○黄川田：自分で言うのもなんですが、国会議員が来たといっても元市役所の係長だというと、各首長は嫌な気がしないんですよ。国会議員はうるさ型でなんか嫌だなんて言うんだけど、元市役所の係長と言うと、自分が使っている職員と同じだなと思うからですかね。

だから、久慈市長の遠藤〔譲一〕さんとか、宮古市長の山本〔正徳〕さん、釜石市長の野田〔武則〕さんとか、大船渡市長の戸田〔公明〕さん、陸前高田は地元だけれども、うちの戸羽〔太〕さんも、みんなよく知っている人でした。もっと言えば、被災地だけではなくて、いろいろ支えてくれたのが岩手の遠野市ですね。

○飯尾：遠野の本田〔敏秋〕市長は熱心でしたね。

○黄川田：本田さんのおかげで、いろんなことが進んだんですよ。後方支援の仕組みとか、あるいは消防の連携とか、いろんなところでお世話になりました。ボランティアといえば兵庫では神戸ですが、岩手にあっては遠野です。被災地で困っている人たちをどうやって支えていくかという、いろんなボランティアの仕組みができていました。

それから建てる土地がないということで、本田市長にお願いして遠野にも応急仮設住宅を作ったんですよ。漁民みたいな元気な方もいるけれども、もうお年を召して海を見たくないという人もいるもんだから、落ち着いて住めるところがいいですよということで、そのあたりもいろいろやってもらいました。岩手の場合は拠点として遠野があって、海岸に行くには必ず峠を越えていかなきゃいけないのです。小さい峠とか、笛吹峠とか、いろん

な峠があって、だから大槌も釜石も大船渡も陸前高田も、遠野にはお世話になってきたのです。

これは余談ですが、実は地震で庁舎がやられて再建しなきゃいけなかったのが遠野市なんです。一関と同じように、内陸の人たちの方がかえって地震の被害は大きかったんですね。本田市長からは「一生懸命自分も支えるから、黄川田さん。庁舎の再建に何も補助がないんだけど、何とかありませんか」と相談を受けたので、復興関連のいろんな資金もできるだろうし、こちらも頑張るからと返していました。それから消防も建て替えをしているんだけど、消防の連携をもっと頑張ってくださいよという話もあって、市なら大体何平米の建物などと決まっているんだけど、それを連携分で増やせるとかいうことがありますし、総務副大臣をやっていたこともあって、そんな感じのやりとりがありました。

○復興庁：戸羽〔太〕市長は物申すことが多かったですか。

○黄川田：私は元市役所職員でしたので復興に思いはありましたけど、当時は国会議員として地元が選んだ市長の後方支援、特に財政支援に取り組んでいました。その中でも戸羽市長は、東京の町田市で育ち、陸前高田市の生まれではありませんが、お父さんが元県議会議員だったので、市議会議員の道を歩み市長となった方です。こうした経緯もあって、戸羽市長は田舎者の人と違い、マスコミ等の人との付き合いが上手でしたね。逆に言うと、それが自分のまちをつくる上での関係で、なかなか馴染めない人もいました。結局のところ、マスコミに使われてはダメで、マスコミを使わないといけないんです。

○飯尾：戸羽市長はメディア対策はうまくても、市の職員のなかでも市長の方針をマスコミから聞いているみたいな人がいて、あんまり内部でじっくりと話をされていなかったようですね。

○黄川田：2月に市長になって、3月にすぐ震災が起きてしまいましたからね。

○飯尾：中のことを知らないわけではないけれど、それでも市役所の中を全部把握しているわけではない状況で震災に遭って、それで職員が亡くなっていて、大変だったと思います。

4. 総務副大臣として（平成23年9月5日～平成24年4月4日）

・総務副大臣就任の経緯

○飯尾：9月5日になって、総務副大臣になられましたよね。これはどういう経緯でした

か。

○黄川田：安住さんが、全部段取りをしていました。安住さんはちょうど財務大臣になって、自分だけ財務大臣になると格好つかないから、黄川田を副大臣ぐらいにしておけばいいと思ったんじゃないですかね。

財務省と総務省は地方の財務も交付税も含めいろんな面があるから、復興において大事な部署です。肝心の市町村が疲弊してはなんともならないという、そんなことを安住さんのところに行って言ったんだと思います。それはそうだろうな、黄川田がやってもいいだろうなという感じになっちゃったんです。

○飯尾：自治体のことは、ご自身も市のことも県のこともよくご存知だから、そういう点で副大臣というのはやりがいがあったんじゃないですか。

○黄川田：やりがいがありましたね。ただ、地方交付税という大金は持っているんだけど、国交省、農水省みたいな個別具体の補助金はないわけです。あったとしても、消防に1台自動車を買ってやるかみたいな程度ですからね。

だから、そこもなんとか動かしていかなきゃいけないと思ったのと、それからお金がないなら人を出せみたいな感じで、やっぱり人材派遣ですね。

○飯尾：これは総務省と相互に自治体から人を出す仕組みですね。

○黄川田：最初は知事会にお願いしてなんとかしようと思ったのですが、もともと総務省にも地域おこし協力隊があったので、農水省の中にあったのとまとめて、厳しいところに人材を派遣することが結構力になると思っていました。私の市は職員が100人もいなくなりましたし、大槌も職員が動けなかったですからね。被災地でも仙台、いわき、あとは八戸とか、ああいうところは自立していたし、最初に被災があったときは大変だったけれども、自力でどんどん復興を動かすことができていました。仙台なんかは5年経ったら、復興関連の部署もだいたい卒業みたいな感じになりましたが、私は大変なところにいたから、仙台だけ復興すればいいのか、という話もありました。だから、職員支援の仕組みや、地域おこし協力隊みたいに若者が行くような仕組みを作って、ということです。

あとは、消防の広域化です。今では何かあればすぐに対応できるような仕組みがあるので、先般も隣町の大船渡で大規模な山林火災がありましたが、すぐさま対応して動けるようになっていました。能登半島地震の関係でも、多分そういう形で、人材派遣の部分ではかなり動きやすくなっているのかなとは思っています。

それから、廃棄物の関係も総務省に関わりがあります。みんな廃棄物っていうんですが、

被災者からすれば自分のものです。その中には位牌があるかもしれないし、何かがあるかもしれないんだけど、それでも一般廃棄物で、平時は市町村が処理することになっているわけですよ。

一方で、産業廃棄物は県です。仙台市は自前でできたんですけど、あとはもう国の力を借りなければ何もできない。そういうこともありました。

○清水：災害廃棄物については、特別委員会の頃に特措法（東日本大震災により生じた災害廃棄物の処理に関する特別措置法）が出ていました。

○黄川田：あれは最初の方の法律でしたよね。被災地に行ってみて、どうにもならないということで、すぐさま出てきた法案でした。復興特別委員会で私が、現場で見えてきたこういう現状についてどう考えますか、仙台市は独り立ちできるだろうけども、私が見た範囲ではこうだった、ああだった、という話をした覚えがあります。そこでは無理を通しても前に何も進まないんです。

・ 5年間入居した仮設住宅

○黄川田：私自身、応急仮設住宅に5年も入っていて、2回の選挙は仮設住宅からやりました。

○飯尾：どこの仮設ですか。

○黄川田：最後にできた奥の方の仮設です。最初に入るわけにはいかないで、8月の末頃、これでみんな入ったなという時期です。入ってみて気づいたのは、雨が降っている日に出入りで傘を差すことができないので、濡れてしまうんです。だから、風除室みたいなところも必要だなと思いました。それからお年寄りには手すりも必要ですし、洗濯して干し物をしたときには、ひさしが欲しくなりました。

仮設もいろいろで、だんだん高規格になってきました。最初のプレハブ協会（一般社団法人プレハブ建築協会）の仮設住宅は本当に大変な状況だったんですよ。

○飯尾：最初の夏は暑かったですよ。

○黄川田：秋になって寒くなってきても風呂の追い焚きがないんです。冷えてくると追い焚きが必要だと思いました。あと基本的な設備を寒冷地仕様のものにしたほうがよかったですね。また、みんな口では言わないけれども、うちの家もそうですが元々はエアコンがなくて、役所の市長室にあるぐらいのものでした。

○飯尾：平時でも東北はそうですからね。

○黄川田：ところが、仮設では1台1台エアコンがつくわけですよ。冬は寒いだろうからと石油ヒーターも来ます。私もいただいたんですけども、1年目は石油ヒーターを使わないで終わりました。

その代わり食台、食べる台がなきゃいけないので、こたつがあればいい。こたつがあって、エアコンがあれば十分過ごせるんですよ。だから、エアコンというのはいいもんだと思いましたよ。みんな住宅再建すると、贅沢になって、いや、考えてみるとエアコンがないと夏は過ごせないなみたいになっちゃってね。実際暑くなってきたので、その通りなんですけど。

○飯尾：国会議員も仮設の視察はするけれど、自分で住んでいる人はないから、そこはよくおわかりだったんですよね。

○黄川田：週刊誌もそれを写したいということだね。上手なもんだなと思いました。記者から福島に従兄弟がいるんだと話されて、福島も大変だという話になり、私の家族にお線香をあげて帰りたいと言われてまして、そうして家の中に入ってきて、ついでに写真を撮っていきましたからね。

○飯尾：それで写真が出たんですか。

○黄川田：週刊誌に出ました。部屋は2つあったけど、1つみたいなもので。隣に仏壇があって、そこで線香をあげていますというようなものになっていました。

・復興基金の導入

○飯尾：その頃にもうひとつ、基金の話がございますね。

○黄川田：はい。平時の予算なら単年度で終わるからいいんですけども、震災時は消化しきれずに、どんどん溜まっていくわけです。やらなければいけない仕事ですが、急遽やれと言われても、マンパワーもないし難しいですよ。だから、繰り越し型にしないと、もう無理だと考えたのです。また、各自治体では、復興のための固有の事業が必要とされていきました。町づくりには、大事な事業です。しかし、財源をどこに求めるのかという課題があったので、基金を造成し、取り崩し形にするということになりました。

○飯尾：国の予算では出せないものもあるからですね。阪神淡路の時は利子でやっていましたが、今回は利率が低くて利子ではできないから、元本に手をつけるという話になります。

○黄川田：基本的に財政力指数が0.2とか0.3のようなところで、どこをひねったってお

金が出てこないわけですよ。ただね、その蛇口を開けるのもいいんだけど、これできるとなると、おんぶにだっこみたいな形で、どんどん要望が来てしまう部分もあるので、その線引きは必要です。ずいぶんきついことを言うな、と市町村に言われることもありました。

○飯尾：それはむしろ身内だからですね。

○黄川田：こんなことではとても 10 年じゃ復旧復興は無理だと、20 年、30 年かかっちゃうよ、みたいなことを言いながら、そういう仕組みを作りながら、ということなんですけれども、陸前高田市の予算は平時で 120 億ぐらいなんです。ところが、一番多いときは 1000 億を超えています。工事費等が莫大だったので 1000 億の予算計上をしたら、盛岡市よりも多くなりました。

・土地区画整理の課題

○黄川田：あとは、やっぱり土地区画整理の問題があります。土地を整理するということはよかったですけど、いろいろ考える余地があるんですね。平時でも 20 年以上かかるようなところを、5 年で終わらせる、10 年で終わらせるという話なので、地権者が納得しないところもありました。まず、高台ができていないのに、どうやって区画整理をするんだという話です。そこで、東松島と陸前高田ではベルトコンベアを導入しようという話になりました。

○飯尾：UR（独立行政法人都市再生機構）がやりましたね。大規模ですからね。

○黄川田：盛り土用の大量の土を用意しなければ無理だなんていうことで、本当に高さ 120 メートルぐらいの小山を、40 メートルぐらいまで削っています。

○飯尾：そうですね、気仙川の向こうから持ってきています。三陸道を通す都合もありましたから、それも削っています。

○黄川田：陸前高田だけだと目立つなということだけど、安住さんのところ（東松島）でもやるから大丈夫だと思いました。ただ、もちろん規模が違うんですけどね。大きい分、時間も長くかかってしまいます。

○飯尾：地元の人のお話なんかも折を見て聞いておられたんですか。私の記憶だと、元の街に戻りたいという方も多かったけど、結局力のある方は自力で再建しますしね。

○黄川田：そうなんです。だから、いつまでも仮設にいて最終的には災害公営住宅に移るような人が、最後の人でした。商店の人の中には自力で、もう 2 年後には自分で高台の

土地を見つけて、そこに住宅を建てた人もいます。やはりそこは、格差があるということですね。

○飯尾：土地区画整理事業は、持ち主の土地を交換するので、土地を持っているような力のある人は、自分で建てることができますからね。

・住民の要望と税金について

○黄川田：関連しますけれども、やっぱり首長は生の声を聞き過ぎるところもあると思います。あれも欲しい、これも欲しい。何もなければ欲しいと言わないだけけれども、何かひとつでも明かりがくると、電球にしろ、50 ワットぐらいじゃダメだ、100 ワットの電球でなきゃダメだみたいな話になってしまいます。どんどん要望が来る中で、それに応えるのも議員の仕事みたいところはあります。

例えば、あの高台への集団移転の中で、国交省では当然のことながら、戸数が何戸以上ある集落が対象みたいなことが決まっていますよね。それで最初は要件が大きかったのを、地元の要望を受けてだんだん小さくしていきます。

高校の後輩で衆議院議員を二期務めた畑〔浩治〕君は国交省出身だからその辺の仕組みをよく知っていて、その上で、彼は彼なりに意見があるということなんだけれども、自分みたいに市町村レベルのところにいると、この町がどうなってしまうんだと考えます。

過疎地には何度も行っているけれども、これまで起こっているのは人口減少、それから少子高齢化です。今後住民が増えてくるなら、例えば、50 戸以上の集落でないと集団移転できないのを5 戸以上に緩和しても、子どもができて、作った集落が元気になっていいのかもしれないけど、結局、現実的にはお年寄りたちが移って、お年寄りの人が亡くなって行って、どんどん過疎地になります。でも、私も首長をやっていたら、そんな要件緩和のことを言っていたかもしれません。

○飯尾：これが難しいところです。ただ、多くの場合は国会議員の方が、なんとなく甘いことをおっしゃることが多かったんですね。先生は、これだけお金をつけても、ちゃんとなしきれるのかという感じは持っておられましたか。

○黄川田：私は市役所の職員だったから、両方見えました。あとは、皆さんから税金をいただいているわけですからね。北海道から沖縄まで税金を払っているわけです。復興基本法の議論の時に、公明党から、防災は大事だから被災地だけじゃなくて全国で使えるようにするべきと言われました。もちろん大事ですから、復興予算の中でやるのもいいんじゃない

ないですかという話になりましたが、それもハードルがありましたね。

○飯尾：これは、秋の臨時国会で自民党が出された修正案ですね。それで、全国で使えるように変えたんですけど。後に流用が問題だとかいうようになっていきますね。

○黄川田：調べてみると極端なものがあるわけです。みんながみんなそうじゃないですけど、沖縄の問題がテレビでも取り上げられていました。

○飯尾：そういう問題が出て、それでまた被災地が責められて気の毒でしたよね。あの当時、臨時国会なんかでも議論をして、どちらかという、予算と特区みたいな話はしていましたし、皆さん反対する人はないので、自民党も協力するという感じでしたよね。

○黄川田：起きてから対症療法を行うのではなく、起きる前の対応を行うということで、それこそ国交省が好きな言葉である強靱化、レジリエンスですが、非常に大事なことです。その関係では、二階〔俊博〕先生にもいい勉強をさせられました。二階先生自身は津波を経験していないと思いますが、11月5日の津波の日を勝ち取られて、こちら3月11日を、と言おうかと思ったけども、生々しいからそれは言えないし、先生の地元の「稲むらの火」の話はちょうどいいですね。副読本みたいな形でも使われていますし。

○飯尾：南海トラフが起こりますから、あれはやっぱり備えておかないといけません。

○黄川田：二階先生も仕上げだということで、いろいろ勉強させられましたよ。

・総務副大臣を辞職した経緯

○飯尾：翌年の4月4日まで総務副大臣をやられたんですね。

○黄川田：小沢さんに辞めるよう言われたんです。自分が出ていくし民主党に未練はないんだから、そんなものは辞めなさいと。いつもの通り、第三者を介して。

○飯尾：一緒にやめなくてもよかったというお話もありますが、これはどういうことなんですか。

○黄川田：自分だけならいいんだけど、同郷で総務省政務官の主濱〔了〕さんが辞められたんです。主濱さんは私の高校の先輩で、歩く六法全書みたいな真面目な人でした。元岩手県庁の職員でもあり、私が陸前高田市の職員をしていた27、28歳頃、県庁に出向したときに向かいの机にいたのが主濱さんなんです。

○飯尾：そのときからのお知り合いなんですね。

○黄川田：主濱さんが政務官で私が副大臣でしょう。主濱さんが辞めて私だけ残るとするのは、同じ岩手の人間としてできない。そういうことで辞めたんですよ。

その後、小沢さんが何をやったかという、新しい党を作るから仲間内の血判状を取ったんです。ホテル全日空に一人ずつ呼んで判を押すわけですが、私は地元の皆さんの声を聞いて結論を出しますと押さなかったんです。

私だけだと思ったら、私に似た人がいるんですよ。階〔猛〕君です。彼は高校の後輩なんです、階君が「黄川田さんも判子押したんでしょう」と言うから「いや私は押さない」と言ったら、驚かれたんです。なんでと聞かれたから、こういう理由だと言ったら「分かりました。私も民主党から出るというのをやめます」ということになったんです。

血判状はもう小沢さんの自宅に行っているわけです。どうするんだと聞くと、取りに行きますと言いました。彼はすごいです。小沢さんの自宅に取りに行ったんですね。階君も私みたいにニコニコしていい人です。なかなか渋い顔をして、弁護士ですからね。東大では野球をやっていたそうで、藤井裕久先生を尊敬していると言いますから、いい人だと思います。

○飯尾：無役にはなられたけど、復興には関係されていたんですよ。その春以降、復興副大臣になるまではどんな感じでおられたんですか。

○黄川田：辞めた事情を地元の人たちもよくわかっているから、何らかの形で関わってくれと言われましたし、首長さんたちとも仲良くしていました。国会議員ですからね。

○飯尾：そういう形で相談に乗ったり、役所の方の人に話をしたりしておられたと、そんな感じですね。

・亡くなった消防団員の共済

○黄川田：震災では大勢の消防団員が亡くなっています。私のところだけでなく、宮城、福島などでも亡くなっているわけです。それで、共済のお金がないのでどうしたらいいですかと総務副大臣だった私のところにも何度も要望陳情が来ていたんですよ。

そういうこともあって、最終的には国で面倒を見るということになりました。平時は年間15億円ぐらいでいいのに、200人ぐらいが亡くなると負担金を48億円用意するみたいな話になりますから、それはもう無理だと。だから、特別職の公務災害の関係ということで、国がその責任を持ってやれたのはよかったですよ。その前段として、消防団員がいかに第一線で活躍したかということも含めて、鉄は熱いうちに打たなければなりません。1年も経つてくると、皆さん忘れてしまいますからね。

○飯尾：最初にも消防団で水門を閉めに行つて犠牲になった方がおられたんですけど、そ

の後の緊急援助隊でも消防は大活躍したわけですね。そういうことで犠牲になった方のための基金（消防団員等公務災害補償等共済基金）がありましたが、めったに亡くならないだろうと思って、ちょっとしか積んでいなかったですね。

○黄川田：そうなんです。100人単位で亡くなるとは思っていなかったんですよ。消防団はボランティアなんだから感謝で返さなきゃいけないということで、消防団の表彰があるんです。

そうこうしているうちに、総務大臣表彰があったんだけど、大臣の代理で黄川田、お前が感謝状を渡せということになったんです。私の地元の陸前高田市消防団も対象ですから、多分配慮してくれたんでしょう。だから「おい、徹からもらえるのか」と言われました。役所で一緒に働いていた人たちですからね。

もうひとつは、東京都にも災害廃棄物の処理など、いろんな面でお世話になりました。出初め式の案内は毎年、総務大臣に来ているんですが、これも大臣が忙しいので代わりに出席させてもらいました。総務省で挨拶文を書くのですが、最後にちょっと付け足して、大変お世話になりましたという話をしました。

○飯尾：東京都はやっぱ力があって、いざとなったら、ずいぶん応援してくれますよね。

○黄川田：現場に最初に行かないといけないのが消防です。県は警察、国は自衛隊ですが、市町村では消防なんです。

○清水：消防団の職掌の範囲を決めないと、という記事を以前読みました。水門を閉めに行って亡くなられたことが、今の弔慰金に収斂していくという話です。消防団の仕事がどこまでかということが分からないので、それによって、かなりの人が亡くなってしまったという問題もありますよね。

○黄川田：消防団の仕事は、条例規則で動きが細かく決められているわけじゃないです。作ったとしても、消防団は江戸時代の火消しみたいな部分がありますからね。でも、あの災害の後にはしっかり管理しています。団員がいてこそその復旧復興なんだ、隊を失ったら何にもならないということです。それから水門の開閉の自動化も進むことになりました。

消防団の関係でもうひとつ。これは復興副大臣になって浪江に行った時の話ですが、浪江にも津波が来ていたんですね。浪江の消防団は、助けることができる人もいるかもしれないけれど、原発事故で避難しなければならなかったそうで、団員としての役目を果たせなかったということが消防団の人の気持ちの中に残っているそうです。そんな話を消防の集まりで聞き、団員の皆さんの大変さを重ねて感じましたね。

5. 復興副大臣として（平成 24 年 10 月 1 日～平成 24 年 12 月 26 日）

・復興副大臣就任の経緯

○飯尾：復興副大臣に就任するのは、どういう経緯ですか。内閣改造があったからですか。

○黄川田：総務副大臣を辞めなくてもよかったのに、中途半端に辞めさせられて、黄川田はかわいそうだと。どっちみち解散で終わりだから、黄川田にやってもらおうということになったんです。これも安住さんじゃないかな。

○飯尾：復興副大臣になって、岩手復興局の担当ということですね。これは、地元を中心に見られた感じですか。

○黄川田：地元が中心なんだけれども、隣町の気仙沼とかね、近いところを見に行ったりしました。気仙沼は火災でやられたり、防潮堤の作りをどうするかとか、いろんなことがありました。区画整理も決まらないままずっと野ざらしになっていたんですよ。

それから、復興副大臣になって、青森にも復興局ではないですが事務所が設置されました。そこでお会いした、八戸で「かもめちくわ」を作っているマルヨ水産（マルヨ水産株式会社）の社長が、発災から数か月の復興特別委員会の時に参考人として呼んだ、水産加工業者の方だったんですよ。黄川田さんは今こんなのをやっているのかという話になって、うちのちくわを食べれば大変なところも乗り越えられるから、ちくわを持っていけど。これも今だったら遠慮しなければならないところですが。

あとは、岩手との県境の階上町にも行きました。同じ被災地でも宮古の北と南で全然違うんですよ。津波の高さが結構違ったので、宮古の北では比較的被災者も少なく早く復興したところもあるんですよ。

ところが、今となれば海溝型、それから千島列島の関係で、シミュレーションすると 20 メートルぐらいの津波が来る可能性があるそうなんです。だから、防災計画もやり直ししなければいけないと言われていています。1年でできるわけではないんですけども、もっとふんどしを締め直してやらないといけない。

皆さんご存じの通り、普代村は 10 メートルの高潮堤を作っていたから、5、6メートルの津波が来たってなんともなかったんです。ただ、次もずっとそうとは限りませんよね。だから、一回ごとだよと。前回よかったから、これでよいということはないですから、必ず見直すなり、どういうものが来るかということ、きちんと心に留めておかないと大変

なことになります。

○黄川田：あとは、津波跡地をどうするか、買い上げて、移転元地をどうするかという問題がありますね。

○飯尾：そろそろそういう時期になってきましたよね。計画ができてきたので、皆さん不安なんですよ。

○黄川田：高度成長の時代なら誘致企業の土地があるとか、まとまっていなくても、土地の交換でうまく立地してやれる部分がありました。今は公園とか、そういう形でしか、大きな土地利用はなかなかできていないというのが現状です。あれがもう少し何か産業用地にならないかとか、思いますけどね。

ただ、500年単位で考えれば、人口が減った後、また人口が増えてきて、日本の国も変わっていくかもしれないわけで、そうなればまた活用されるようなことがあるのかもしれませんがね。そういったかたちで、跡地の利用の関係は、自治体ともやりとりをしていました。一気に解決するぐらいの何かってというのは、なかなか見えてこないものですね。

・生業の再生とグループ補助金

○黄川田：話を戻しますが、震災復興といえば農林水産省、あるいは国土交通省なんかは常に活躍していましたが、生業をどうするかということが問題でしたね。

農林水産業に関しては船を作ってやればいいのか、農地を早く回復させるとかあるんだけれども、それはどちらかという社会資本整備なんです。商工業の皆さんには支援がなかった。経産省が打ち出したグループ補助金が、相当の役割を果たしました。生業の再生に4分の3の補助金を出すということは、これまでなかったことなのです。商工業の立ち直りなくして地域経済の存続はありませんからね。

しかしながら、石巻あたりの水産加工にしても、どんどんやって元気になれるかというと、もちろんなったところもあるんだけれども全体としてはなかなか難しいところもありました。

ただ、今までなかった仕組みで、これまで事業主たちにはほとんど補助金がいかなかったのが通例でしたから、今後どうするかは課題はいっぱいあるけれども、生業の再生なくして復興なしといった考え方が打ち出されたのは良かったですね。

○飯尾：酔仙酒造さんも山の方に立派な工場を建てられました。

○黄川田：本当は地元建てられれば良かったんですけどね。ちょっと場所がなくて隣の町に行きましたが、トヨタ（トヨタ紡織株式会社）の指導で立派な工場ができました。もともと酒造会社は、広域の小さな酒造会社が合併してできた施設なので、いろいろな会社が入っていますからね。どこにあっても悪いということはないんだけど。

○飯尾：そういうことで、うまくいったところもあれば、その後なかなか続かなかったところもありますよね。

○黄川田：そうなんですよね。首長では自分たちのお金で生業の再生というのは難しい。だいたい市町村レベルだと商工費なんていうのが一番少ないんです。商工会・商工会議所に補助を出すぐらいで、生のお金を出せるようなところはなかったもので、それは県の仕事、あるいは大きく言えば、国の仕事みたいな話になります。

それができたということ、またそれを何とか活かしたいというところは、各首長共通の思いですね。復興副大臣になってもそう思いました。それは、会計検査院から見てどうかということになると、様々なところがあるかもしれない。ただ、そういうものやってみないと、次のいいものをまた作ろうということになりませんから。深い反省をするためにそういうものやってみなきゃ、反省もないということです。

6. 政権交代以降（平成 24 年 12 月～）

・野党として見守る復興

○飯尾：その後、政権交代となって野田内閣はおしまいになりましたが、そのあたりはどんなふうに見ておられました。

○黄川田：最初から言ってる通り、復興に与党も野党もないと思っています。10年で32兆円ぐらいだったか、基本計画が変わったわけでもないですし、生まれれば、その計画をきちんと成就しないといい復興、いい復旧にならないということで、関わってくれる人たちも、よくやってくれていました。

もちろん野党になったので、復興特別委員会の委員としてきついことも言わないといけなくて、我が民主党には反対のための反対をする人も中にはいましたが、自分は淡々と質問をしていました。

○飯尾：安倍内閣も別に復興を否定するんじゃなくて、加速と言っているのだから、さらにやりたいということですよ。

○黄川田：まず集中復興の5か年ということで、これはきちっとやらなきゃいけないということですよ。5年をもたずに野党になってしまったんだけど、それでもね、この5年が正念場だっていうか、ここがきちっとできないといけないと思っていました。もちろんなんでもできるわけではないけども、特別会計にしたんだから、何をやっていたんだということが言われてはいけません。そこを私は気にしていました。

○飯尾：ただ、陸前高田はなかなか5年では抜けられなかったんですね。

○黄川田：土地も土台もできていなかったんです。その頃は高台造成事業や大規模な地区画整地事業の工事が進んでいなかったのだから5年も自分が仮設住宅にいたみたいな話になっちゃうんですけどね。

それで集中復興を5年やると、先にお話しした通り、仙台市のようにある程度ゴールが見えてくるところも出てくるわけですよ。逆に5年経って、福島はどうなんだと。行程表通りに進んでもいないし、どうなっていくんだっていう思いも出てきますしね。

○飯尾：福島は行程表が作れないという感じですかね。

○黄川田：ALPS で浄化してきちんと海水に混ぜて、今では濃度が薄くできるようになりましたけれども、今後はどういう展開になるんだろうと思います。

○飯尾：課題は多いですね。

・土地処分の迅速化に関する法律の提案

○清水：政権を下りられた後のところで、黄川田さんが筆頭で提案をされている法案がひとつあります。先ほどの区画整理の話とも関わるのかと思うのですが、土地処分の迅速化の法案の関係です。

○飯尾：あれは手続きを簡素化するための法律で、岩手県が一生懸命やっておられましたね。

○黄川田：そうなんです。住宅移転先の高台用地や、防潮堤の拡張のための用地など、自治体による復旧・復興に必要な用地の取得には、多くの課題がありました。こういった土地の中には未登記のものが少なからずあるわけで、特に相続登記の関係など、土地所有者の特定は大変なことになりました。さらに、土地の共有や行方不明者の問題もありましたから、私有財産の処分は、本当に難しくなっていたんですね。

自治体には用地取得のためのお金はあるんですが、登記をしないと地権者に支払えないという原則があるわけで、県をはじめ市町村も同じ悩みを抱えていたので、早期着工のた

めの手続きの簡素化が求められていました。原則は原則として、別の道はないかと考えるところもありましたが、岩手の人は大人なので、まずは国で認めてもらわなければいけないということで、提言をしていたのです。

○飯尾：やっぱり土地柄がありましたね。

○復興庁：別の法案で、確か階先生とかが中心になって進められて、先に収用を行って後からお金を払うための仕組みを提案したのもありましたが、どう思われていましたか。

○黄川田：階君もね、一生懸命なんです。ただ、真面目だけでは被災地はいけないというところは、まあ彼は足りないところよりもいいところが多いからプラマイプラスで、その堅物さがまたいいのかもしれないですね。階君みたいな方ばかりでも困るだろうし、私みたいな人がいっぱいいてもさらに困るということです。

・地域で異なる復興の進捗

○黄川田：言いたいことは、5年ぐらいまではいいんだけど、6年ぐらいからは、なかなか足並みが揃わないんです。例えば石巻とか陸前高田は足並みが一緒なんだろうけれども、岩手の中でも、例えば北の方の町村なんかは、もうこれでだいたい終わりだなという形になっています。

○飯尾：釜石あたりは、それなりに形になってきたんですよ。

○黄川田：特に釜石は縦軸と横軸の道路ができて、ラグビーのワールドカップがあって、先にいろいろできましたからね。他の地域は三陸縦貫道の縦軸だけなんだけど、釜石は遠野からの横軸もできたので、ちょうど結節点みたいになっていたんです。だからか、釜石はどちらかという、あまりガミガミ言わないですよ。野田（武則）さんも温厚な市長さんですから。

○飯尾：野田さんの人柄もあるけど、だいたい自然にできてきましたね。

○黄川田：岩手の中でも北の方の復興が進んできて、例えば、3月11日は追悼の日ということで、みんなで式典をやっていたんだけど、5年でひと区切りでという流れになるわけです。県も旗揚げしてやっていたんだけど、宮古、釜石、大船渡、陸前高田で回しますとか、盛岡でやりましょうとか、そうなるんですよね。

それから、なりたくてなったわけじゃないという復興大臣の方々が出てきたりね。個人として一生懸命やるつもりがあるんだろうけれども、どこかにそういう思いや違いが出てくるというか、それがちょっと残念だったなと思います。逆に言うと、それだけ復興が進

んできたということの裏返しではあるんですけどね。

・未来への震災の伝承

○黄川田：自分の反省も踏まえてなんですけども、この震災がどうやって将来伝わっていくのかなということなんですよね。

見えるような形で、福島は双葉、宮城は石巻、岩手は陸前高田に、伝承館のようなものができていますが、15年も経ってくると、震災を知らない子どもたちが中学校を卒業しますし、市役所にいる職員も世代交代をして、震災の後に入ってきた人たちもいるし、どんな形で伝わっていくのかなというところですね。こうだったな、ああだったなと、私の言葉でしゃべった通りですが、明治29年はこんなだったんだぞと言いながらも、全然それが実になっていないという感じがします。

被災地でも避難訓練とかをやるんだけど、だんだん出てくる人たちも少なくなっていますし、たった2時間我慢すればいいんですけど、その2時間が勿体ないとなっています。津波は逃げて一日経てば大丈夫ですが、それができないから、みんな流れて2万人も亡くなってしまうということになるんですよ。台風でもなんでも、他の災害は一日で終わらないので、あとからいろんなことがあって大変なんだけど、津波の場合は命さえ守ればいいんです。

歴史をもっと掘り起こして、1000年前、500年前ぐらいにも巨大津波が起きていたなんて、そういうことを普段から言われていれば良かったのかもしれない。もしくは地質を掘り返して、宮城県あたりだといつの時代、何の時代に津波があったらしいとか、それこそ史跡になるようなものもあるぐらいだから、そこでみんなで自分のうちではどんなことをすれば良いかも含めて話しておけば良かったのかもしれない。いろいろあるわけですよ。

○飯尾：未来に伝えていくためには、どうしたらいいと思いますか。

○黄川田：どうしたらいいですかね。試験に出して、明治29年に津波がありました、みたいなね。そういえば、宮沢賢治は生まれた年が明治29年（明治三陸津波の年）で昭和8年（昭和三陸津波の年）に亡くなっているんですよ。

○飯尾：先生ご自身は、どう伝えていくかが大きな課題だと最初から思っておられるんですね。

○黄川田：発災した時から、なんで私はこう失敗したかなと思うんです。夜中の発災なら、自分自身も流れて、この世にいないということがあり得たことですからね。

あとは、第二期復興創生期間が終わって卒業ということになって、福島もなんとか頑張っ
てほしいんだけど、ただ、自ら生きる力を作らないとなというのは思います。

自分で言うのも変な話ですが、国からは、かゆいところに手が届くくらいのケアをやっ
ていたけれども、お金がついたからこれはやりましょうみたいに逆になっているようにも
感じていました。それがいいのか悪いのかは、わからないですが。

15年というひとつの節目だから、被災地の市町村は自ら問いかけないといけないですね。
首長が問いかけをすれば、市民の一人ひとりも問いかける気持ちになりますからね。

○飯尾：やっぱり一番気にしておられることなんですね。

・14年をふり返って

○黄川田：人生は一回しかないけれど、いろんな経験をさせてもらいましたね。

○飯尾：させてもらったといっても、大変な思いをされたので。

○黄川田：東日本大震災のようなものは、必ずまた来ますからね。今は12メートル、13メ
ートルもの防潮堤もできていますから、弱まった波が来るのであって、津波がそのままの
勢いで来るわけではないんです。既に12メートルのかさ上げもしていますね。

あとは、陸前高田は土地が余っていると言いますが、岩手県の沿岸部で一番平地が多い
んですよね。次の計画は、明日中に復旧しなくてもいいんだから、むしろ10年後の姿、20
年後の姿をしっかりと描くということが大事ですね。

○飯尾：新しい人が来るというのもご縁ができて、外から来ている人も結構いますでしょ
う。

○黄川田：市議会議員でも、2人他の自治体から来られた方がいますね。若者たちには本
当に、いい意味で刺激をいただいています。

○飯尾：そういうことも含めて、新しいまちができてくるんじゃないですかね。その中で
昔津波があって、こんな目に遭ったというのが語り継がればね。

○黄川田：そうですね。私は自分の家の墓石の隣に追善碑を立てて、津波のことを刻みま
した。婿養子に来て不思議な話なんですけど、私は12代目なんです。先祖が江戸時代に伊
達の塩奉行から塩の販売する権利を与えられたときに川村っていう屋号をもらったんです、
名前は黄川田ですけどね。

それが明治維新で没落して、お墓もどこかわからなくなるぐらいになったのです。婿
養子として私が来たもんだから、うちのことをわかっているやつがこの歴史を刻んでおか

ないと、あいつが跡を取るんだらうからということで、家の歴史をしっかりと伝えなければならないとあって、墓石よりも大きな石を立てて、そこには 1,000 文字ぐらいで没落の歴史が書かれていて、親戚一同力を合わせて頑張っていかなければならない、という言葉で締めくくられているんです。

だから私は、祇園精舎の鐘の声と最初を書いて、その次に明治 29 年に三陸地震があって、昭和 8 年にもあって、そしてチリ地震があったと。そして今回の災害があって、それから今の町は、例えば、森と川と海があっていいところなんだというようなことを書きました。これを言うと笑われますが、陸前高田は岩手の湘南ということになっていて、県で一番いい砂浜だったんです。そういう町がこういう状況になったけれども、みんなで力を合わせて復興に邁進して、それぞれの家や集落がまた元気を取り戻すようにということで、自分の命があるうちに石碑にしてしまったんですよ。

○飯尾：お墓だと、子孫の皆さんに見てもらえますね。

○黄川田：そうですね。私も小学生のとき毎日通学途中に、石の階段の高いところに石碑があったんですよ。地震があったら高いところに逃げなさいという内容で、こんなところにもあったんだけど、その中身は伝わっていなかったんです。だから、そういうのをずっとやってきたのに、ということで反省してもしきれないぐらいですね。

震災は必ず忘れた頃にやってきます。皆さんのいろんな調査、あるいは我々から聞いた話などさまざまありますが、きちんと風化しないで残って活かせるようにしたいですね。

○飯尾：今回のこのインタビューも、その一助と思ってご対応いただきまして、ありがとうございました。

(了)